



case 10 情報通信業

株式会社河北新報社

時間に追われる新聞業界の中で、法定を上回る育児・介護休業制度と経済的支援策を拡充・実践

法定を上回る育児・介護休業制度に加え、休業中も基準内給与の一定割合分を支給することで経済的なバックアップを図り、複数の男性従業員も育児休業を取得しています。また、少ない女性従業員同士が強いネットワークを築き、仕事と子育ての両立経験が共有、継承されています。

企業プロフィール

創刊：1897年
本社所在地：宮城県仙台市青葉区
事業内容：日刊新聞発行、デジタル情報発信、各種事業開催
従業員数：543名（うち女性63名）[2013年1月1日現在]

法定を超える育児休業制度と経済支援により、大きな安心感を

当社の育児休業は、最長では子が満2歳に達する月末まで取得できます。労使交渉の積み重ねの中で決めてきたものです。最長2年というのは、限度いっぱいという考え方ではなく、保育所に入所できないなどの事情に対応できるよう、法定より少し余裕を持たせることで、不安を解消しようというものです。そして、育児休業中は原則無給ですが、会社から「特別見舞金」として、基本給の20%を支給します。雇用保険による育児休業給付金と合わせると、給与の70%を保障し、経済面でのバックアップを図っています。

このような制度が背景にあることもあり、男性の育児休業は1999年以降、9名が取得しています。取得期間は当初、2～3週間という短期間でしたが、その後100日を超えて取得した従業員や、子育てのリアルな体験を連載記事にした記者もいます。

特徴的な制度と取組み

- 最長子が満2歳に達した月の月末までとした育児休業制度。
- 介護休業は180日まで取得可能。
- 育児・介護休業中、会社から基本給の20%を特別見舞金として給付、経済面をバックアップ。
- 看護休暇の対象を拡大、小学生以上の子どもや親等にも利用可能に。看護・介護休暇ともに有給かつ半日取得が可能。



総務局 人事部長
石川 正宏

介護は様々なパターンがあり、知識や情報の提供も必要

介護休業は、法定以上の延べ180日まで取得可能です。育児休業制度と同様、基本給の20%を特別見舞金として支給しています。性質は異なりますが、育児は介護の予行演習にもなるという考え方もできます。育児と異なり、介護は終わりが見えない中でどう対処するかという問題があり、自宅介護か施設介護かによって、休業のしかたも変わってきます。そして、育児に比べると介護の経験者は少なく、例えば介護施設を探す場合など、情報が少ないことから苦慮するケースも多いようです。今後はそうした部分も含めて、会社としてどのようにサポートできるかも課題になっています。

制度をどう活用していくかは、自分で考えることが大切

育児や介護支援制度の運用に関しては、有給休暇の取り残しを先に使うことや、届け出要件を緩めたりするなど、柔軟に対応するようにしています。短時間勤務は法定通りですが、部署内での調整を尊重するなど、あまり細かくしすぎずにやっています。どういう働き方をするのは、本人の知恵や周囲の協力によるところも大きいと思います。

ワーク・ライフ・バランスについては、2007年に社内委員会を設置し、両立支援策と並行して検討してきました。しかし、どう位置付けて実践していくかは難しいところです。制度を整えたとしても、どう働いて、どう地域で暮らしていくのかは、人それぞれです。例えば、ボランティアや社会貢献活動も1つの軸でしょう。自分のプランは自分で見出していくことが大切だと思います。



制度紹介のしおり

従業員の声

会社は女性社員を「戦力」としてみてくれ、制度を利用した経験も後輩に継承できた



営業本部 事業部
木村 浩子

●利用した制度：育児休業(1年6カ月間)

女性のネットワークができていく職場で励まされた

女性社員が少ないこともあって、女性同士の結束力が強く、ネットワークがしっかりできている職場です。育児休業中は、2カ月に1回、人事担当の女性が会社の情報などの資料を送ってくれる際に、子どものことを一言書き添えてくれたりして、子育て中の孤立感も解消され、励みにもなりました。妊娠してから育児休業を取るまでの職場では、つわりの時期には声をかけてくれたり、周りのサポートもあって、無理なく仕事をすることができました。女性社員も「戦力」として見てくれていたように思えます。育児休業の延長を申し出た時も、快く受け止めてもらい、本当に助かりました。自分が職場復帰した後、育児休業取得者が増えたと聞いています。制度を利用したことが、他の人たちの育児休業取得につながったのであれば、自分の体験も無駄じゃなかったのかなと思います。

「忙しいお母さんの姿を見て育った子は絶対優しい子になるから」を心の支えに

2011年4月から事業部に異動し、公募展の企画運営の仕事などで忙しい毎日を過ごしています。子どもに会えない日が続いた時は、自分の選んだ道は子どもにとってどうなんだろうと悩んだこともあります。仕事でお世話になっている先輩ママに相談したら、「忙しいお母さんの姿を見て育った子は絶対優しい子になるから」と言ってくれて、それを心の支えにしています。子どもには、時間がある時に凝縮して愛情を注ぎたいと思います。

そして、自分一人だけが頑張っているのではなく、家族や職場の協力があってこそ仕事ができているのだと感謝しています。忙しい中でも、人とどう接し、感謝していくのが、復帰後も仕事を続けていくうえで大切なのではないかと考えています。